千葉県生活協同組合連合会
千葉県生協連活動報告
2026/1/4　№329
発行：千葉県生協連
TEL　043-224-7753

平和の懇談会を開催しました！

12 月 19 日に、千葉県生協連の主催による平和の懇談会『「平和」について次世代継承のあたらしいかたち』を開催し、28 名の参加がありました。

打越会長理事

はじめに千葉県生協連の打越会長理事より「被爆・戦後 80 年の締めくくりとして、平和や核兵器の恐ろしさ、悲惨さをどのように伝えていけばよいのか、中村さんのお話を聞き、これからの活動について皆さんとともに学び、考える時間としていきましょう」と、挨拶がありました。

中村涼香さん

講　演「平和について」次世代継承のあたらしいかたち
講　師　NPO 法人ボーダレスファウンデーション
理事　中村　涼香　さん

◆平和活動が仕事　NPO 法人ボーダレスファウンデーションは、社会課題の数だけ社会起業家が必要というコンセプトにより、世界 14 か国 50 事業をおこなう株式会社ボーダレスジャパンが母体です。非営利だからこそ解決できる社会課題のため新たに NPO 法人を立ち上げ、現在、そこで平和に関する事業をおこなっています。

◆活動の原点　高校時代の部活動で、被爆者の方々とともに国内外で核廃絶に向けた活動をおこないました。その活動を通じて被爆者の方への尊敬の念を持つと同時に、署名活動や座り込みで本当に核兵器の実数を減らすことができるのかという漠然とした疑問を感じていました。大学進学後は政策的な面から核軍縮に貢献するために KNOW NUKES TOKYO を立ち上げ、ICAN のキャンペナーになりました。ICAN が開催した海外のイベントは、とてもファッショナブルで誰でも気軽に参加できますが、参加者同士で話す内容はとても深いものでした。その体験から、企画の立て付けを変えるだけで参加者層が変わることに気づき、東京で平和と他の社会課題を合わせた企画を開催。多くの若い世代の参加がありました。

◆平和活動を事業化する！　卒業後にこの活動を事業とするため、社会起業家を育成するプログラムなどに参加しました。そこで核兵器廃絶という社会課題を、違う分野の人が言語化したことから、今までとは異なる形で事業化できるのではないかと気づきました。

◆事業化のためのミッション　アンケートにより、若い世代を含めた 8 割の人々が平和活動に対してハードルを感じてることがわかりました。そのハードルを払拭し一緒にアクションを起こす人たちの層を増やすために「被爆 100 年の新しい平和活動をつくる」ことを事業化における重要なミッションとしました。

◆きちんと情報を届ける　ヒアリングから、広島、長崎に行くことで平和や核について考えるきっかけとなることがわかっていたため、地理的、心理的な距離を超えてより多くの人がこの問題に触れる機会を作ることを目指す、「移動型の原爆資料館」を考えました。民間開催の利点を生かし、クリエイティブやアートの力を用いてトラウマを生まないメッセ

ージを届けます。プレ企画として「あたらしいげんばく展」を東大で開催し、4 日間で 1,000 人が来場しました。被爆地外でも関心のある人がいること、その人に情報が届けば行動すること、そして今までその人たちが関心を向ける場がなかったという感触を得ることができました。

◆ビジュアルとインパクト　核廃絶に向けた活動は直接話を聞く、実際に資料を見るなどアナログな情報発信が中心です。しかし、SNS による情報元が主流の現在、そのアナログの発信とはとても相性が悪く、それが社会に広がらない原因の一つと感じています。「渋谷にきのこ雲を浮かび上がらせる」という企画は、すぐに消化されてしまう情報の中で AR を使いビジュアルでのインパクトから、8 月→原爆の日そして最終的にはアナログの情報にたどり着くためのきっかけとなるようチャレンジしました。未完全な作品でしたが社会における反応を仮説検証するために公開し、ある一定の世論喚起にはなりましたが、「この作品をみて広島、長崎に足を運び、アナログの被爆体験にたどり着いてもらう」とした成功の定義までは、至りませんでした。しかし、この作品をきっかけに活動の異なる人と繋がり、話ができたことは、事業化する上で、今後の広がりにつながりました。

◆平和感の数値化　2025 年夏に日比谷で開催した「平和の作り方展」では事前に今を生きる人たちの本当の平和感を数値化すためのリサーチなどをおこないました。意見の違いがあっても 95%近くの人が平和を願っていることなどとても興味深い結果がでました。自分自身がアクションを起こすきっかけをつくることが大事だとこの調査でわかりました。

◆新しい形の事業化に向けて　原爆資料館での一次的な展示を超えるものはありません。しかし民間だからこそできる、若い世代を取り込む表現や参加の方法を意識し、「平和への入り口をもっと近くに、もっと自由に」をコンセプトに掲げ、地理的、心理的ハードルを越えることができる「移動型の原爆資料館」を作成しています。

また、日本中のいたるところで大小様々な平和の企画が行われている社会を目指して、主催者側、発信者側になれるキットを構想しています。

◆めざす社会　そしていつか、「核兵器を失くす選択のできる社会」、これは「核兵器のない世界」ではなく、「核兵器は無くてもいいよね」と自分の意思が選択、発信できる社会、人権が尊重される社会が実現することを想像しながら事業をおこなっています。

（文責　事務局）

このあと、中村さんの講演を聞いた感想、今までの平和の取り組みとこれからできることについて参加者で共有しました。

参加者アンケート　（一部抜粋）

・今の活動はアナログですが、次世代に繋げる活動をおこなっていきたいです。
・工夫次第で興味のある人に届けられることに気づきました。
・若い方々に関心を持ってもらうことが課題ですが、今日聞いた「新しい形」という発想がとても斬新で驚きました。
・県内の生協の統一の取り組みで平和活動を広げていきましょう。
・今後の平和の取り組みを考える上で大きなヒントとなりました。
・生協が違っても同じ思いで活動していることがわかりました。一緒に思いを実現する活動ができたらいいですね。
・今まで「事実をきちんと伝える」ことが目的でおこなっていたことに、交流を通して気づきました。